

Emily Dickinson

—その Summer Poem について—

真 柳 節

I

if God had been here this summer,—
—I guess that He would think His Para-
dise superfluous.

1882年、即ち彼女の死の4年前に、Emily Dickinson は30年に亘つて親しく交際をつづけて来た Mrs. Holland に次のような手紙を書いている。

^It sometimes seems as if special months gave and took away—August brought the most to me—April—robbed me most—in incessant instances—⁽¹⁾

特別の月が与え、又特別の月が取り去ったように時々私には思えます。八月が最も多く持って来、四月が一番多く私から奪い取って行きました。—しかも、ひつきりなしに次々と。—

1882年4月1日には、彼女の意中の人であつたと定説になつている Charles Wadsworth が死んでいることから推量して、八月にはそれと対立した特別の意味があると仮定し、夏を主題にしたものの中 Love Poem とと思われるものに spotlight を当てて考えてみたい。

I shall keep singing!
Birds will pass me
On their way to Yellower Climes—
Each—with a Robin's expectation—
I—with my Redbreast—
And my Rhymes—

Late—when I take my place in summer—
But I shall bring a fuller tune—
Vespers—are sweeter than Matins—Signor—
Morning—only the seed of Noon—
Emily Dickinson は前にも述べた如く Shake-

spere には大変な傾倒を示している。⁽²⁾ したがつて、“Shall I Compare thee to a Summer's day”と、自然の季節の夏を、人生の盛りの青春に喩えた Shakespeare の有名なソネット十八番には当然親しんでいたと思われる。そのことの明確な証明にはならないが、1856年には Joseph Haven 夫人に宛てた手紙で「或る夏の午後に私達が御近づきになつていたらと思ひました。でも夏の午後は、私にとつては、あまり沢山の翼を持つていたのです。だから、やがて、貴女も飛び去つてしまつたのですわ」といつている。vivid な生命力に溢れる緑の夏がこの頃までには、彼女の心の中で特別の意味をもって成長し始めていたことはたしかである。しかし、その特別の意味が時と共に、又それにつれて作品と共に少しずつ色調が変化しているように思える。

上述の詩 No. 250 の中で「夏に自分の位置を占める」とは愛の成就のことであろうか。

—朝の鐘よりも優雅に鳴きひびく晩鐘—
とは、長い一日の終り、即ちこの世の生の終り頃に愛が成就することである。暖い気候を目指して飛び去つて行く小鳥たち。駒鳥には駒鳥の夢がある。独り取り残されて見送つている自分だが、私も駒鳥のように胸に赤い望みをもつて詩を歌いつづけるのだ。Vespers (晩鐘) という言葉のせいばかりでなく、この詩全体には一種の哀感が漂つている。しかし彼女は、まだは

I

- (1) The Letter of Emily Dickinson, ed. by Johnson, P. 744
(2) The Poems of Emily Dickinson, ed. by Johnson No. 250, 1861
(3) 北星短大紀要第10号所載拙稿参照

つきりと愛の成就に期待をもっている。早生の花より香ぐわしいと言われる晩生の花を、この世に居る間に豊かに咲かすことをまだ信じているのである。

しかし翌年1862年には No. 307 で次のように言っている。

The One who could repeat the Summer day—
Were greater than itself—though He
Minutest of Mankind should be—

And He—could reproduce the Sun—
At period of going down—
The Lingering—and the Stain—I mean—

When Orient have been outgrown—
And Occident—become Unknown—
His name—remain

ここで用いられている Summer は少くとも、彼女自身の「愛の成就」とは考えられない。たとえ人目に立たぬ小さい人間であつても夏の日を繰り返えすことの出来る人は、夏自体よりもすぐれている。去りがたいように残映を漂わす夕陽の素晴らしさを再現することは困難ではあるが、それを成し遂げたいと切望する程貴重なものであり、又もし成し得たとしたら、その人の名は、西空も東の空も残映が消え失せて、何も見えなくなつた頃に浮び出て来るのである。repeat, produce は共に詩人としての創造であり、したがつて Summer day はも早や芸術の対象物として、一定の距離を置いて扱われている。

しかし、距離をへだてて眺めたはずの夏の日⁽⁴⁾は又しても彼女の心の中に忍び込んで来る。

I know a place where Summer strives
With such a practised Frost—
She—each year—leads her Daisies back—
Recording briefly—“Lost”—

But when the South Wind strives the pools
And struggles in the lanes—
Her heart misgives Her, for Her Vow—
And she pours soft Refrains

Into the lap of Adamant—
And spice and the Dew—
That stiffen quietly to Quartz—

Upon her Amber Shoe—

毎年老巧な霜と戦つては「負けたと」一言だけいつて、ひな菊を連れ去つてしまう夏なのだが、南の風が小道にうごめき、水溜りをさざめかす頃になると、夏は自分の誓いが心配で、再び優しいリフレンをそそぎかける。客観的に眺めようとした夏の日の愛の思い出は、季節毎に、冷え切つた彼女の心をあやしく掻き立てて、甘い情緒が再び心の中に蘇生して来る。緑の色で目に知らされぬ中から、風の感触で彼女は誰よりも早く夏の訪れを知るのである。しかし、固くなつてしまつた金剛石の自分の懐ろに注ぎ込まれた香ぐわしい匂と露——夏の日の思い出は、透明な水晶のように音も立てずに凝固して詩作品となつて行く。夏の日は、実に愛の思い出を呼びさます能力を持つと同時に、それを詩作品へと定着させる強い力を彼女に与える季節なのである。しかし次の No. 322 の詩では、このぎらぎらした芸術家意識がいぶし銀のように抑えられて、全体が一つの metaphor となつて大きい問題を提示している。これは彼女の Love Poem の本命として、大抵の場所で論じられているものであるが、以下この詩を中心にして、彼女の夏の真意に近づいてみたい。

There came a Day at Summer's full,
Entirely for me—

I thought that such were for the Saints,
Where Resurrection—be

The Sun, as common, went abroad,
The flowers, accustomed, blew,
As if no soul the solstice passed
That maketh all things new—

The time was scarce profaned, by speech—
The symbol of a word
Was needless, as at Sacrament,
The Wardrobe—of our Lord—

Each was to each The Sealed Church,
Permitted to commune this—time
Lest we too awkward show
At Supper of the Lamb.

The Hours slid fast—as Hours will,

(4) The Poem of E.D. No. 337

Emily Dickinson Summer Poem について

Clutched tight, by greedy hands—
So faces on two Decks, look back,
Bound to opposing lands—

And so when all the time had leaked,
Without external sound
Each bound the Other's Crucifix—
We gave no other Bond—

Sufficient troth, that we shall rise—
Deposed—at length, the grave—
To that new Marriage,
Justified through Calvaries of Love

夏の真盛りに或る一日がやって来た
全く 私だけの為に
復活があるとしたら
聖者の為の復活日はこんだからろうと思った

太陽は常のように高々と昇り
花々は習慣通りに咲き開いた
まるで 全てのものを新たに作る夏至を
誰も通らなかつたように

語らいで 時は殆ど汚されなかつた
言葉による あかしは
必要ではなかつたのだ 聖さん式の
主教の持ち衣装のように

お互は お互にとっての秘められた教会
子羊の晩餐の席で
私達があまり不作法を示さぬように
今この時聖体拝領が赦されたのだ

どん欲な手で握りしめていたのに
時間は意のままに狂いなく過ぎて行つた
反対の二つの土地へ向う
二つの甲板の上の顔が振り向く

だから 時間が音も無く
全部 こぼれ落ちてしまった時
互は 相手の十字架を背負っていた
吾々は 他の絆は交わさなかつたが

それは やがて墓から抜け出て
愛の十字架によって義とされた
あの新しい結婚へと 旅立つには
十分な婚約のしるしであった

或る晴れた夏の盛りの日であつた。それは彼女には忘れることの出来ぬ一日である。長い一生の中では、一日は、ほんの一瞬に過ぎない。しかも、二人の愛情を証し合つたのは、その夏の一日の中での更らに、その一瞬間なのである。誰も気づかぬ程平常通りに、四辺では自然の営みが行われていた。その証しは、言葉では現されずにふと交錯したお互の眼の中で認め合つたのである。貴重なこの夏の日の時間が容赦なく握りしめた指の間から漏れ落ちる。この日が終ればシンデレラに赦された時間のように、二人は再び遠くに切り離されてしまうのだ。だがその一瞬の眼射しの交りによつて、互は互の十字架を身に縛りつけた。それはこの世の先にある世界での結婚を信じ、この世にある間は安んじて愛の苦悩を背負うに足る程の確固とした証明であつた。彼女は希望に燃えて墓場に入る。やがてその墓から出て、この世で背負つた愛の十字架によつて正当化された新しい結婚へと旅立つことが出来る十分な婚約の徴しを身につけたからである。

では現実の彼女の生涯の中で、このような夏の日が実際に訪れて来たのであろうか。この詩は彼女が最高潮の creative power に満ちていた1861年の終り頃に書かれたものらしいが、この五年前に、既に夏について特別の感懐を抱いていた事が Holland 夫人への手紙で示されている。そして、この少し前に彼女は Wadsworth に会つたらしい。——もしバラが枯れず、霜も訪れず、あちこちに眠つていて、今私が目覚めさすことの出来ない人達が死ななかつたとしたら、この下界は天国ですから、この他には天国は必要ないでしょう。そして神様が、もし今年の夏ここに御出でになつて私の見たものを御らんになつたら、きつと御自分の花園が過剰すぎると御考えになるでしょう。でも断じて、神様にそんなことを仰言らないで下さいね。こんなことを言つていても結局私は神様が槌も石も日雇職人も御使いにならずに私達の為は何を作つていらつたのか知りたいのですから——⁽⁸⁾

(5) The Letter of E. D. p. 329

夏の日には神が人間の為に天国に似せて作りたもう贈物である。しかもすぐ "Lost" と言つて人間の眼から御隠しになる天国の片鱗であり、この世では過剰に与えられてはならぬものなのである。

II

In Winter in my Room
I came upon a Worm.

しかし Clark Griffith 氏は上述の No.322 の詩を恋愛を主題にしたものではなく、うつろい易い時の流れ、たまゆらの⁽¹⁾ 歡喜をねらつたものであると断定している。以下彼の Standpoint に立つて Emily Dickinson の Love Poem を解釈してみたい。

この詩には、たしかに人の心を打つ一種のきらめきがある。しかしそれは詩に含まれた挿話に由来しているのではない。絶え間なく流動するものの中に身を置いている不安定感その原因である。この流動するものは時間であり、Emily Dickinson は常々そのことを意識している。だからこの流動の中での彼女の持ち時間が slide し leak し終えた時、握りしめている指の間から、彼女が手離し、見失つてしまう相手は、全体的にみた場合、誰であろうとあまり重要ではないのである。必要なことは時の経過を意識することによつて、絶えず彼女の心象に不安感と欠乏の状態をひきおこすことである。時の流れは又、時折には入念ないたづらを仕組んで救済に似せた偽りの演技を行う。時間は停止し、二人の絆を固定するかのようになり、じつと夏至を支えている。だが第五連に到つて、時間は無慈悲にも再び回転し始め恋人達を切り離してしまふのである。彼女は、たしかに愛の剝奪を歌つているのであるが、その奪われるものは特定の或る人物ではなく、時の気儘な流動の中で触れ合つたかきそめの出合の人物ということが出来る。というのは、この詩に限らず殆ど全ての彼女の Love Poem の中で愛の相手については

具体的な描写がなされていないのである。それに反して、この時間の意識は大抵の Love Poem に浸み込んで居り、愛の達成と同時に、時間の流れの介入による愛の別離が用意されている。

時の流れを絶えず意識することによつて、地上での全ての人間関係がはかないものであることを知つた時、詩人は、人間の愛情が永遠に続き、肉体を脱ぎ捨てた恋人同志が、も早や別離を知らずに住むことの出来る遠い天国を渴かれ求める。この天国での愛の成就是勿論抒情詩の伝統的パターンであり、彼女が親んだ Shakespeare, Donne, Mrs. Brownig 達も唱い上げたものである。

しかし彼等の詩には、いづれも愛の対象があり、この世から奪い去られはしたが、天に向つて詩人が直接に呼びかけをしている特定の人物が示されているのである。しかし Emily Dickinson の Love Poem の扱いは第一に時間の流動、無常感を取り上げ、愛の対象者は、その主題の手段として下位に置かれている。それ故、彼女の呼びかけの相手は曖昧な "You's" や "he's" であり、具体的な身元証明がなされないのではなからうか。Richard Chase 氏は Emily Dickinson は、結婚によつて女性に与えられる特別の階級を強く意識していると論じている。⁽²⁾ 彼女の結婚の概念はたしかに、歡喜や恍惚と同時に、女性にとつての特別な階級の高揚を伴つている。結婚式を経ることによつて、花嫁は普通の娘から女王の地位へ、或は女のもろもろの特典を赦されたものへと変貌する例を次の三つの詩の断片から拾つてみよう。

No. 199 I'm "Wife"—I've finished that—
That other state—
I'm Gzar—I'm "Woman" now—
It's safer so—
How odd the Girl's life looks
Behind this soft Eclipse—

No. 732 She rose to His Requirement—dropt

II

- (1) The Long Shadow, Emily Dickinson's Poetry,
by Clark Griffith, Princeton Press, p. 116
(2) Emily Dickinson, by Richard Chase
American Men of Letters Series, p. 112

The Plaything of Her Life
To take the honorable Work
Of Woman, and of Wife——

No. 508 I'm ceded—I'm stopped being Their's—
The name They dropped upon my face
With water, in the country church
Is finished using, now,
And They can put it with my Dolls,
My childhood, and the string of spools,
I've finished threading——too——

Chase 氏の「階級の上昇説」のみでは、この詩の中に仕組まれている高度な逆説に言及することは出来ない。Emily Dickinson は、彼女がしばしば用いる例の独特の逆説によつて、⁽³⁾ここでも、結婚を一つの効果的な経験として扱っているのである。上の三つの詩の中では、いずれの結婚にも、それに付随した損失が用意されている。それは、No. 199 では、Woman になる為に捨てた Girl's life であり、No. 732 では、妻としての名誉ある仕事に就く為に落した遊び道具である。又、No. 508 では、両親が田舎の教会で水と一緒に子供の自分につけてくれた洗礼名や糸巻であるように、それらは結婚の代償として余儀なく捨てねばならぬものである。そして、cede という動詞によつて、それらが無理に強いられた放棄であつたことが暗示されている。又、彼の Requirement に対する No. 732 の詩の第二連、第三連とつづく不吉な遠慮や No. 508 の中にみられる結婚の犠牲となる少女の美德の目録等は、結婚そのものの価値を高めるのに必要な道具である一方、その結婚が遂げられた次の瞬間に待ち受けているもの——時間の持続に対する或る種の不安を仄めかしている。しかもどの場合も話者はあくまでも受動的な立場でその放棄の要請を受け入れている。男性が常に絶対的な権力をもつて行動をおこすのに対して女性は全く無力であり、何の抗議もなせずに身をまかせているのである。

以上の力関係を更に押し進めて行けば一般には自然をテーマにしたものと考えられている No. 315 の詩も風の描写としてではなく Griffith 氏のように sex assault であるという極端な解

釈も可能かも知れない。

He fumble at your Soul
As players at the Keys
Before they drop full music on——
He stuns you by degrees——
Prepare your brittle nature
For the Ethereal Blow
By fainter Hammers——further heard
Then nearer——Then so slow
Your Breath has time to straighten——
Your Brain——to bubble Cool——
Deals——One——imperial——Thunderbolt——
That Scalps your naked Soul——
When Winds takes in their Paws——
The Universe—— is still——

この He が何であるかを判定するのは大変むづかしい。恋人とも或は擬人化された自然ともとれ、又 imperial という形容詞によつて神であるとも考えることが出来る。He が何物であるかは別として、次第に残忍さを増して来る順に並べられた強い意味の動詞によつて、その行動の性質を判断すべきである。始めに手さぐりし、次に叩きつけながら気絶させ、準備をととのえて deliver し、むき出しの魂を剥ぎ取つてしまう彼は、狂暴性を露出して襲いかかつて来る rape の姿を彷彿させる。彼の執拗な力に対して彼女は brittle nature であり、演奏者に叩かれるピアノの鍵盤、槌に打たれる標的、息をひそめて落雷を待つ静けさ等によつて性格づけられ、最後の行に到つて「彼の爪によつて驚づかみにされた森」という metaphor が示される。

第7行から第12行にいたる脈打つようなリズムは暴行それ自体の行程を示すものであろうか。Griffith 氏は、この詩全体を無気味な猥褻さに転じている一種の浮かれ気分を指摘し、それが Spinster Emily の神経症の露われである⁽⁴⁾ことに注意すべきであると強く主張している。同氏の説によれば Emily には一種の男性恐怖症のようなものがあり、それが No. 520 の“by the Sea”と題された詩では、エプロンを着け、犬を連れて朝早く海辺へ出かけた女の子を追い

(3) 北星短大 紀要 第10号 所載 拙稿参照

(4) The Long Shadow p. 172

かけて来る波の姿を借りて現れている。彼女の男性に対するこの怖れ、重圧感は何に起因しているのであろう。Griffith氏は彼女が親しく交際したのはほんの少数の男性であつたという事実に着目すべきだと説いている。この少数の男性達はことごとく彼女を失望させたのである。先ず彼女が非常に尊敬し、愛情ある手紙を送つた父親の Edward は人を寄せつけぬ厳格さを具えた人物で、彼女の娘らしい愛情を受け入れ彼女の要求にふさわしい応答を示すという能力は持ち合わせていなかった。又兄の Austin に対しては、父親に挫折させられた愛情を倍加して注ぎ込んだにもかかわらず、その愛情に対する彼の答えは、彼女の幼友達の Sue との結婚という事実であつた。又彼女が臆病な様子で始めて自作の詩を送つた男性の批評家 Thomas Wentworth Higginson も彼女の要求を満たしてはくれなかつた。詩を理解する能力の点では、自分が Higginson に優越していることを彼女が程なく看破していたにもかかわらず、彼は彼女の詩について叱言を言い恩看せがましく述べ立て非難したのである。しかも彼女は、彼のやや的外れの論評に対して、適切な防禦の手だてを組立てることが出来なかつた。最後に、いや第一に、神さえも、父親と同様に彼女を突き離してしまつたのである。神に向つて彼女が求めたものは確信であつた。彼女は激しく信仰の根源を、特に不滅を信ずる基盤を求めた。

しかし Emily Dickinson の神は引込み思案に黙しているだけであつた。彼等男性から受けた幾多のこの無視による侮辱は、男性の能力に対する嫉妬や敵意となり、放け口の無いままに彼女の内部で大きくふくれ上つて行つた。男性に対する嫉妬は時には男性に対する憧れとなり、憧れる度に繰り返して傷めつけられる。やがて男性のイメージは彼女の心の中で或る強大な危険なものとなつて浮んで来る。それは女性に対する支配力を持つ故に強力であり、その支配力を使つて女性を拒絶したり、痛めつけたりする故に危険なものであつた。したがつて彼女の男性観は畏れと苦々しさ、崇敬と恐怖の、

落付きの悪い奇妙な感情の混合物である。この二つの感情の衝突は、自然を扱つた詩の中では、度々繰り返えされている弱者と、それを破壊する強者のパターンへと変形しているのである。

さてこの男性に対する怖れが、彼女の隠遁生活と共に昂じて行き、40歳頃までには、全く白衣のみを纏い鼻にかかつた子供つばい言葉で、——Griffith氏は、彼女の子供つばい動作は大人の世界、男性の世界から身を守る彼女の武器であるといつているが——親しい来客とも、物陰にかくれて短い会話を交わしたといわれるあのエキセントリックな彼女の生活の原因である、と説明する。そして、まだ誰にも解釈されていないあの「冬に私の部屋で」で始まる無気味な出来事の No. 1679 の詩

In Winter in my Room
I came upon a Worm
Pink lank and warm
But as he was a worm

And worms presume
Not quite with him at home
Secured him by a string
To something neighoring
And went along.

については、先ず“pink, lank and warm, the worm signifies the male sex organ”と断定している。たしかにこの詩は、男彼に対する恐怖感に裏付けされているような気がする。だが第一連に於て、場違いなみみずの侵入に対して、彼女は不快感を現わしていないばかりではなく、第二連では珍らしい斑点のある蛇に変つた worm snake を、権力の環をつけ、内部からの変貌を成し遂げることの出来る素晴らしいものとして眺め

But state with creeping blood——
A snake, with mottle rare,
Surveyed my chamber floor,
In feature as the Worm before,
But ringed with power.

第三連ではおつおつと会話を始める。

I shrank “How fair you are!”
Propitiation's claw——

“Afraid,” he hissed
“of me?”

又恐怖と賞讃の交り合ったこの奇妙な経験の中で、一本の紐が効果的な作用をしている。それは単に女性の脆い防禦力を示すものとも思われるが、逆に別の意味で、紐を、蛇と話者をつなぐ或る特別の関係の象徴と受け取ることは出来ないであろうか。男性に対する以上のような潜在的な感情を彼女は、はつきり自分で意識していたわけではない。この詩の最後が、

This was a dream—

で終っている如くこの詩全体の出来事は、悪夢による経験であつたかも知れない。だから、spinster として一室に閉じ込めた彼女の生活の中に出没したのは、Griffith 氏の主張する如く、彼女の愛を拒絶した年上の既婚者という定説の男性ではなく、狂暴な assault をこころみる妄想上の男性であつたのであろうか。男性に対する神経症的な彼女の歪んだ概念が love と rape を混同し、彼女を「愛」や「生活」そのものから尻込みさせたのであろうか。

■

Born—Bridalled—Shrouded— In a
Day

狂暴な力に絶えず脅かされているような彼女の恐怖感は何に根ざしているののであろう。妹 Lavinia が生れる為に、母の実家に送られた二歳半の彼女は、途中で激しい雷雨に出合う。無蓋車の上で若い叔母に抱かれた彼女は、次第に烈しくなる雷妻をみて “the fire!” と叫んだ。大きいコート一枚で雨と風を避けながら暗い松林を通る時、彼女は母親の名を呼んだが泣声は立てなかつた。雷鳴は尚もとどろいて居た。⁽¹⁾ この出来事は、その時以来根絶出来ぬ恐ろしい印象となつて彼女の心に焼きついたのかも知れない。彼女の心の中深く消え残っていた恐怖の断片が、何時しかふくれ上り、人間の脆弱な営みを破壊する嵐や雷妻、時には Griffith 氏のいう

如く男性の姿になつて、彼女を脅迫したのではなからうか。

Mrs. Ward はこの幻影を手さぐりして、難解とされている Emily Dickinson の Love Poem に一つの燈火を灯した、

1859年頃、彼女は夢の中に現れて来る一つの幻に気づき始める。その幻はその頃既に籠り勝ちであつた彼女の気分を浮き立たせる不思議な力を持つていた。彼女はその幻を King と呼んでいる。

No' 103 I have a King, who does not speak—
So— wondering thro' the hours meek
I trudge the day away—
Half glad when it is night, and sleep,
If, haply, thro' a dream, to peep
In parlors, shut by day.

これは、彼女が、ある一人の男性に対して、無意識に抱いていた感情のあらわれであるかも知れない。しかし王と呼んで居るその幻は、まだ輪郭もおぼろに遠く霞んで見えるだけである。不思議な沈黙を守りながら幸福を運んで来るその幻は、まだ形のないシンボルにすぎない。彼女の日常の生活は、彼の支配を受け、新たな意味を帯びて来る。しかし彼との交際は、まだ夜の眠りの半ば現つつつの状態の中だけにとどまつて居る。

Werd 夫人はこの幻の王について——彼女の内部で次第に明確な形をとり始めて居たある懸命なものがき——それは多分詩人としての自己を認めることであらうが——と、測り知れぬ深みに潜んでいる彼女自身の本来的性質とを流通させる一つの媒介物が必要な時期であり、自分の全存在を集中し、生命の全てを知る為に彼女が求めて居た救済者であつた——と看破している。⁽²⁾

幻の王は、彼女自身の意識の覚醒に助けられ、次第に明瞭な人間の姿をとりつつ夢の中から抜け出て来る。彼女の想像力の集積によつて作り

(1) The Years and Hours of Emily Dickinson, by Jay Leyda, new Haven: Yale university press, Vol. I p. 920

(2) The Capsule of the mind, by Theodora Ward Harvard University press: p. 50

上げられた映像は神の可能性にも匹敵する力を
 具えた生の間人像であつた。しかし五感と情緒
 による経験を経なければ、その人間像を完全
 に知ることは出来ない。そして1860年頃 Emily は
 愛の探験を始めたものと思われる。しかし、彼
 女はためらい勝ちにまだ戸口の前で待ち受ける
 だけである。

No. 221 Come slowly—Eden!
 Lips unused to Thee—
 Bashful—sip thy Jessamines—
 As the fainting Bee—

Reaching late his flower,
 Round her Chamber hums—
 Counts his nectars—
 Enter—and is lost in Balms.
 エデンよ ゆつくり入り入つしやい
 あなたに馴れていない唇は
 はにかむけれど ジャスミンをお吸いなさい
 ふうふうした蜂 が

遅れて花にやって来て
 小室の周りをぶんぶん飛んで
 蜜を調べ
 入り込んで 香りの中で気を失うように

彼女はこの他にも、一度ならず花と蜂の比喩
 を使つて恋を歌っている。ひと度束縛を解かれ
 た彼女は、自由を得たよろこびに溢れ、吾が身
 を、砂漠を馳けめぐる密林の猛獣になぞらえ叫
 び声を上げている。

No. 209 With thee, in the Desert—leopard
 breathes—at last!

希望に満ちた潑刺とした感情が彼女の生命の
 中に溢れ、創作力の炎が勢良く燃え立つた。
 —I taste a liquor never brewed—に始る
 有名な No. 214 の詩は、この頃 (1860) に書か
 れたものである。しかし恋の甘酒に酔しれて
 endless Summer days を何時までも千鳥足で
 歩くことは現実の世界では赦されぬことであつ
 た。彼女はふと酔から覚めて、自分のこがれて
 いる相手に気づいたのではなからうか。正気を
 とり戻した彼女は、運命の掟に従つて、自分を
 引き戻そうと強制する。この頃、いろいろの異
 つた主題と情調の詩が、土台から揺らいでいる

彼女の心理状態を語っている。それらは、或る
 時は、生命そのものの観喜に浸つている「蜂と
 私の二人」No. 230 の幻想であつたり、又或る
 時は、No. 236 の「もし彼が消え失せるなら
 それなら もう 何も無い 真夜中の 日蝕 以
 前の暗やみ」のような暗い陰鬱な叫び声になつ
 ている。

これらの詩が危険信号であるかのように、極
 端に動揺する彼女の感情は平衡を失つて行く。

この世にありながら、彼女の為に存在する
 ことを中止してしまつた人に向つて、“Doubt
 me! my Dim Companion!” No. 275 と呼び
 かけた彼女が、No. 277 で

What if I say I shall not wait!
 What if burst the fleshly Gate—
 And pass escaped—to thee!

と叫んでいるのは、彼と天で交る為の手段とし
 て自殺さえ考えたのではなからうか。そしてこ
 の絶望感が頂点に達した時、彼女の内部にあつ
 た何物かが実際に死んだのである。

No. 280 I felt a Funeral, in my Brain,
 And Mourners to and fro
 Kept treading—treading—till it seemed
 That Sense was breaking through—

彼女の頭の中で葬式をしたのは何であつたらう
 か。彼女の現実生活での最後の支柱が、会葬者
 のきしむ足音につれてこぼれる意識と共に、去
 つて行つた。葬式の後には無感覚の真空状態が
 残つた。その真空状態の中で、彼女はもう一度生
 命の根源と触れ合つたのだらう。とに角、“And
 I, and Silence, some strange Race Wrecked,
 solitary, here—”そして、互に見馴れぬ人種
 の、私と静寂だけが、みじめに、ここに、残さ
 れた”のように、彼女がその経験を非常に明確
 に記録することが出来たのは、正常な精神の境
 界を越えなかつたことを物語っている。

しかし彼女の精神をさいなむものに耐えて立
 ち上る為には、いま暫くの苦しい一時期が必要
 であつた。やがて、先の絶望の詩とは全く異つ
 た詩が生れて来た。

Alone, I cannot be—
 The Hosts—do visit me—

Recordless Company—
Who baffle Key—

の第一連で始る No. 298 は第三連の最後は

For they're never gone—

で終つている。これは幻想の中の人物達によつて彼女が孤独から救われたことを意味している。彼女の戸口を訪れるまぼろしは、名も分らず、曆も無く、捉えようもないが不吉な感じはしない。此の頃、彼女は詩人としての自己を意識し、創作力の溢出するままに仕事に没頭したものと思われる。この幻の客達は、彼女を訪れたミューズの神であつたろう。そうなれば、先に論じた No. 322 の「夏の盛り的一天」の詩の中で、恋人同志が反対の方向に旅立つという意味が朧気に分つて来る。少くとも彼女は詩人としての仕事に向つて旅立つのであろう。

そして、一年が経過し、夏が再びめぐつて来た。彼女は、No. 348 の 'I dreaded that first Robin, So,' のように、過ぎ去つた夏の日の傷心と呼び醒ます者達がやつて来るのを怖れる。しかし最初の一声をあれ程心配した駒鳥にも、彼女の心をほんの少し痛めただけで、もう馴染んでしまつた。珍しい黄色の上着を着て自分の心の中に苦しい悲しみを突き通すことだろうと気づかつた水仙も、早く背丈が伸びて私を眺めぬようになれと願つた雑草も、何一つ間違いなく去年通りにやつて来て、

They're here, though; not a creature failed—
No Blossom stayed away
In gentle deference to me—
The Queen of Calvary—

キャルヴァリーの女王となつた私に、おだやかな敬意を払うのである。そして又更に No. 379 では

Rehearsal to Ourselves
Of a Withdrawn Delight
Afford a Bliss like Murder—
Omnipotent—Acute—
We will not dropt the Dirk—
Because We love the Wound
The Dirk Commemorate—Itself
Remind Us that we died.

遠くに去つた観喜を引き戻して、復唱している

と無類の正確さで行う謀叛のような満足感が溢く。その傷痕がいとしいから短剣を捨てずに持つているのだ。短剣はその傷の誉れを伝え自分が死んだということを思い出させてくれる記念品であるからと、一種のサディスト的な客観性をもつて自分の傷痕を眺めている。人の意表をつく全く奇抜なこのコンソートを分解してみると、Omnipotent 全能者の正確さをもつた Murder とは詩人として要求される条件の一つであり、彼女が恋の傷手の記念として手離そうとしない Dirk 短剣とは、或る人物の面影であろう。この詩によつて、「4月が奪つて行つた」意中の人に対して彼女が如何なる姿勢で臨んでいたかが分りかけて来る。そしてかつては恋の興奮に狂う吾が身を象徴して用いた猛獣のイメージを、新たな生命と共に充満して来る自己の全存在を暗示する為に、再び起用している。そして、彼女の内部から溢き出て来る根源的な或る何かは、社会の何所にも坐を占めることの出来ない豹であり、No. 492 の

Civilization—spurns the Leopard!

と彼女は、アジアを去り、異国の地へ追いやられた野獣に——それは詩人自身のことであるが——対する同情と理解を乞うている。

pity—the Pard—that left her Asia—

激しかつた嵐の後、風は方向を変へたが、まだ完全に鎮まつていない。彼女は、名残りの嵐がざわめき立つ廃虚の中で、心の再建を始めなければならなかつた。まるで一瞬の洪水で流された住居の跡に、唯一人、その夜の為めの小屋を整えるように、何時しか身に具つていた気丈な態度で、手さぐりに進んで行つた。そして、やがて一つの悟道へと辿り着く、その悟りは No. 1181 の短い詩に、完成された凝縮と統制の形で示されている。この詩は、1871年に詩人の手によつて、他の三篇の詩と共に Higginson 氏に送られたものであるが、最初に手がけたのは1862年頃でありその後九年の間で三度書き変えられている。

When I hoped—I feared—
Since—I hoped—I dared
Everywhere—alone—

As a Church—remain.
 Ghost—may not alarm—
 Serpent—may not charm—
 He is King of Harm—
 Who hath suffered Him—

希望の無いところには怖れは無い。与えられた運命をそのままに受け入れることによつて、希望と怖れの間には緊張している不可避な葛藤を取り除くことが出来る。最悪の苦しみを耐えたものは禍から解放された王であり、事実をそのままに受け止めた固い岩の上に立つているのである。そして、岩の上には別の新しい登り口が開かれたのである。

だが愛は消えたのではなかつた。ただ形を変へたに過ぎない。又、Emily の心がかつては leopard の奔放にまで掻き立てた「男性の能力」は既に彼から引き出されて彼女の身に具わつていたのである。そして、その力が彼女の全存在をゆるがしたあの情熱的な興奮状態を芸術の中へと移入させた力となつた。

しかも一方には、女性としての Emily があつた。女性の全てがそうであるように、Emily も又、その後しばらくの間は、かつて自分の全精神を傾け尽した恋人の中に、自分の生活の焦点を見出さねばならなかつた。

I tend my flower for thee—
 Bright Absentee! No. 339. 1862

「輝かしい不在」である貴方に私の花を捧げますと呼びかけ、この世にありながら、彼女にとつては既に肉体を持たぬ魂だけのものになつてしまつた恋人との天国での結婚を願うようになる。そして No. 1072 の Born—Bridalled—Shrouded—In a Day—とは「生と死」を同時に含んでいたあの強烈な経験の全てであつた。そして彼女を打ちのめした失恋の苦悩は魂の恍惚へと変貌を遂げたのである。

Title divine—is mine!
 The Wife—with the Sign!

IV

That I did always love I bring thee proof

では、今から凡そ百年前、ニューイングランドの小さな町に住んでいた Emily に 1776 篇の不思議な詩を書かせる原動力となつた恋人は実在したのであろうか。これは従来から伝記作者の好餌となり、彼女の詩そのものの研究よりも彼女の周辺を探ることに多くの努力が払われ、伝説めいた数々の物語りが出来上つていたらしい。そして、その反動であるのか、最近ではつとめてその点については negative な態度がとられているようである。

Griffith 氏は前述の如く Emily Dickinson の偏執的な男性恐怖症を説明した後で、“With whom was Emily Dickinson in love? With no one, I imagine.”⁽¹⁾と言つている。又彼女のいわゆる「愛の悲劇」とは、彼女が自分自身以外は実際には誰をも愛さなかつたということにあり、彼女の Love Poem はその時代の詩人として世に迎へ入れられる為の手段として、彼女が捏造したものである。それ故に彼女の Love Poem は単調であり独創性の点でも「死」をテーマにした彼女の詩に比較して、かなり薄弱であるとまで極言している。Emily Dickinson 自身もたしかに No. 594 のように

The battle fought between the Soul
 And No Man—is the One
 Of all the Battle prevalent—
 By far the Greater One—

と、魂と、「不在の男」との間で交わされた戦闘と言つている。しかし、Griffith 氏のこの態度は公正さを欠くのではないであらうか。彼女を見つめる氏の男性のレンズは Spinster Emily に焦点を合わせすぎたように思へる。

では Mrs. Theodora Ward は女性としてどう取り扱つていようであらう。Emily Dickinson の心の友であつた Holland 夫妻の孫である Ward 夫人は、祖母に送られた 36 通の未発表の手紙を屋根裏部屋で発見して以来 Emily Dickinson の研究者となり、Thomas H. Johnson

(3) There are two manuscripts, the first one was written about 1862

(1) The Long Shadow, p. 183

博士の助手として、各全三巻よりなる Emily Dickinson 詩集、及び書簡集の編纂にたづさわった。綿密さと注意深さを要求されるあの困難な大事業を経験した人にふさわしく、夫人は一つ一つの詩を精密に調べ上げて信頼出来る一つの仮説を建て前章で述べたように Love Poem の group に新しい解釈を加えたのである。しかし夫人は「Emily Dickinson を根底から動揺させた男性が誰であるかを証明する必要はない。又彼女の恋愛の対象として一人の男性の存在を仮定する必要が殆どない程彼女の感情は彼女自身の錯綜した内部世界に密接につながっている。しかし、この時期の筆跡で書かれたもので“Master!”と彼女が呼びかけている宛先人不明の手紙が残っていることに注意しなければならない。その内容がもし空想だけで書かれたものならば、それは狂った頭か或は意識を偽造するほどの緻密な組立て力をもった頭の産物であるはずだ。しかし、そのような精神状態のどちらの場合も、この時期の他の手紙や、多種多様の詩を書くことは出来ないであろう⁽²⁾と、きわめて暗示的である。

この頃にかかれたいわゆる“Master Letter”とは、1858年、1861年、1862年のものと思われるいづれも相当の長さの三通の手紙であり、詩人の死後手許に残っていたものである。誰に宛てられたものか、又彼女がそれらを実際に投函したものかは一切不明である。そして最後の手紙には次の一節がある。

“Master—open your life wide, and take me in forever, I will never be in tired—I will never noisy when you want to be still. I will be your best girl—nobody else will see me, but you—but that is enough—I shall not want any more

これは明らかな愛の告白、いや求愛である。又これに対する返事と思われる差出人不明の手紙が残っている。

“My Dear Miss Dickinson

I am distressed beyond measure at your note, received this moment,—I can only imagine the affliction which has befallen, or is now befalling

you. Believe me, be what it may, you have all my sympathy, and my constant, earnest prayers.

I am very very, anxious to learn more definitely of your trial—And though I have no right to intrude upon your sorrow yet I beg you to writeme, though it be but a word.

これは Wadsworth の筆跡で書かれているが、C. W. と太字のサインがあるだけで彼の名は記されていない。

1855年妹と共に父に連れられて Washington に旅行した Emily は Philadelphia を訪れ、たのしい時を過しているが、そこで始めて、Arch Street Presbyterian Church の牧師である Wadsworth に会つたらしい⁽¹⁾。彼はその時40歳、聖職者としてのに使命感溢れ、人生で最も充実していた頃であり、既に幸福な結婚生活に入っていた。そして Emily は25歳、まだ人生の哀しさを知らなかつた。彼に対する特別な感情はその後の文通によつて次第に培われて行つたのであろう。そして1860年の3月半ば頃彼は始めて Dickinson 家を訪問したのではないかといわれている。その時の模様は晩年の詩人の、空想とも現実ともとれる手紙もによつて推量するより他に術はない。

a letter from Emily D. to James Clark, Oct. 1882
—I knew he once had a Mother, for when he first came to see me, there was Black with his Hat. “Some one has died” I said. “Yes”—he said, “his mother”—“Did you love her,” I asked—He replied with his deep “Yes.”

Wadsworth の母親は1859年10月1日に死んでいる事実からみて、この手紙の内容は空想とは思へない。

そして1862年5月1日 Wadsworth は妻と二人の子供を伴つて California に旅立つた⁽⁴⁾。当時 San Francisco まではパナマ経由三週間の船旅であり、Emily にとつては地球の裏側程に遠い地であつた。「去年の九月以来、私は一つの怖れを持つていました」と Higginson に書き

(2) The Capsule of the mind p. 49

(3) The Letter of E. D. p. 382

(4) The Years and Hours of E. D. Vol I, P, 330

(5) ibid. Vol 2. p. 57

(6) ibid, Vol 2. p. 57

たのは、その六日前であるが、多分彼女は前年の九月頃からこの転任について知らされていたのであろう。彼が着任した教会の名は“Calvary Chnrch”であつた。これは彼女が詩の中で幾度も自分を「キャルヴァリーの女王」と呼んで居ることを思い出させる。しかし、この距離的な彼との別離が、例の隠遁生活の原因ではない。以前にも述べたように例の隠遁生活は、あくまでも創作活動に必要な積極的な手段なのである。だが白衣を纏つた理由は、やはりWadsworthとの出来事に関係があるのではなからうか。例のMaster Letter の中でも——What would you do with me if I came “in white?”⁽⁸⁾といつてゐる。

Wadsworth は7年後1869年暮れに Alexander Church に招かれて San Francisco から Philadelphia に戻つた。そして1880年の夏、突然 Emily を訪問する。20年振りのその劇的な再会の場面は、2年後に書かれた Holland 夫人への手紙に記されている。——或る夏の夕方ベルが鳴りました。思いがけぬことでした。「何故 知らせて下さらなかつたのですか、お待ちするたのしみがあつたでしように」「自分でも分らなかつたのです。説教壇から真直ぐに足が向いて汽車に乗り込んでしまつたのです」と彼は静かに答えました。「私は何時でも死ぬ用意が来ています」と言つたその言葉を私は不吉な予感とは思いませんでした。——

又、1886年4月15日付 C. H. Clark 氏への手紙には次のように書かれている。——生前、彼が最後にやつて来た時、私は百合や、ヘリオトロップと一緒に居りました。女中に訊ねている彼の声を聞きつけて、妹が「エミリー、深い声の男の人が貴女に会いに来ています」といいました。——

自分の恋愛感情を意識してから、Emily が彼に現実に出つたのは、この最後の機会を加えて二度である。しかし、現存している三通の master letter とは別に、1862年以降も彼との文通は続けられたらしい。しかも穿さく好きな村の郵便局長の目を避ける為、それらは、1877年

から1879年までの間、Holland 夫妻の手を経て発信された形跡があるのである。

letters to Mrs. Holland:

——I enclose a note, which if you would lift as far as Philadelphia, if it did not tire your Arms—— would please me so much.

Would the Doctor be willing to address it? Ask him with my love.—— December 1877——

——I ask you to ask your Doctor will he be so kind as to write the name of my Philadelphia friend on the Note within, and your little Hand will take it to him——

又、1882年4月1日に Wadsworth が死んだことを知つた Emily は、彼の終生の友であつた James Clark 及びその弟 Charles Clark と文通を始め、その後、約20通に上る手紙を交換し、Wadsworth の思い出を語つてゐる。——私は彼を「悲しみの人」として知つてゐます。——彼は Willie という子供の事以外は家庭の事を話しませんでした。そして私が Willie に似てゐるといいました。——彼は苦悩の海から生れた「薄明の宝石」です。——彼の子供達はあの聖なる命の失われたことを嘆いたでしようか。子供達は彼に似てゐますか？ Willie は似てゐるでしようね。彼があのように愛してゐたのですから——等々。

又1883年には Holland 夫人に——愛した人の死は全ての時間に値します。今、愛は一日の日付があるだけです。四月一日は、今日であり、昨日であり、そして永遠なのです——と語つてゐる。

さて以上述べて来た資料を辿つてみると、Emily Dickinson は実際には恋をしなかつた。Summer Poem は彼女が、愛読した抒情詩の伝統にしたがつて、始めに彼女の頭の中で作られ、後には Spinster の神経症的な幻覚の中から生れたという Griffith 氏の説は極端すぎるように思へる。彼女の初版の詩集に“proof”と題されて載つた No. 549 の詩

That I did always love
I bring thee proof

(7) 北海道英語英文学第六号所載拙稿参照

(8) The Letters of E. D. p. 375

Emily Dickinson Summer Poem について

That till I loved—
I never lived Enough—

That I shall love alway—
I argue thee
That love is life—
And life hath Immortality—

This—dost thou doubt—Sweet—
Then have I
nothing to show
But Calvary—

私が絶えず愛していたことを
その証明を貴方にもって参ります
私が愛を知るまでは
十分に生きてはいなかったことも

この先も絶えず愛しつづけることを
私は貴方に誓います
愛は命であり
命は不滅であることも

このことを 貴方が 疑うのなら
それなら 私は 何も
御みせするものはありません
キャルヴァリーの他には

までも吾々は虚構ということが出来るであろうか。この詩は少し傾くと歌謡曲に陥る危険性がある程通俗的である。しかし彼女は決して甘い感傷で歌っているのではない。もし、これを稚拙と呼ぶなら、それは「空想の恋愛遊び」の職人が手なぐさみに作り出した非写的な稚拙ではなくて、詩人の技を忘れる程恋の生々しい苦悩

に身を焼く作者が、素材のままに押し出した故の稚拙であろう。

彼女は、たしかに恋をしたのである。しかもそれは、始めからこの世では実を結ばない相手であつた。又彼女の内部に詩人としての発芽が萌していた途上で彼を知つたことは偶然とは言へない。この世での結婚が可能な相手であつたなら彼女の詩は生れなかつたであろう。父の許には年若い学者や法学生が出入りしていたにもかかわらず、40歳の Wadsworth に魅かれて行つたのは、その芽を強く成長させる為に予定されていた必然なのである。

——私は愛する時間が無かつた。でも何かを生産しなければならぬので、あの小さな恋の労苦が、私にはふさわしい仕事だと思つた。——No. 478 のこの言葉は、詩人 Dickinson を鮮明に浮かび上らせ、恋をした女性 Emily の姿を遠ざけてしまう。しかし、正反対の二つのもの⁽⁹⁾引き合う力関係が彼女の詩の重要な economy の一つであることを思へば、詩人 Dickinson と女性 Emily の力関係はおのずから理解されるのである。この二つは同じ力を持たなければならない。彼女の Creative Power が最も充実した時期である1858～1862に Summer Poem が開花したことは、この二つの力が同じ量をもつて Emily Dickinson の中に同時に存在したことを物語っている。

(9) 北星短大紀要第10号所載拙稿参照